

緩和医療科後期研修プログラム

I. 目的と特徴

1. 教育

(1) 学部教育

当講座は、2003年に誕生したわが国初の“緩和医療学”講座であり、世界で23番目の緩和医療学講座である。緩和医療の本幹をなす緩和ケア病棟は、1987年に七栗サナトリウム（現、第三教育病院）の建設に際し既に設置されており、藤田保健衛生大学の先見の明を象徴するものである。1997年に大学病院としてはわが国で初めて認可を受けており、加えて2003年の講座開設以来、これまでのケアが中心であった終末期医療に対して一石を投じる意味で、①癒し環境の構築、②全人的医療の実践、③緩和ケアNST（栄養サポートチーム）の設立、④コミュニティの確立、⑤腫瘍学の導入、⑥独立型地域連携の創設、⑦情報共有と発信力の強化の七本柱を提唱して伝統と最新の知識・技術が重なり合った専門性の高い講座としての地位を確立している。2010年、本学第一教育病院に新たに緩和ケアセンターが開設され、本講座の診療領域が大きく拡大されることになり、全国トップクラスの最新医療を展開する急性期病院の第一教育病院と、同時に専門性の高い医療施設である七栗記念病院という二つの優れた教育施設での特徴的な緩和ケア教育の実践が可能となった。

また、当講座は、世界トップクラスの栄養管理を組織横断的に展開しており、全国のNST活動においても指導的な立場でより良い医療構築のために心血を注いでいる。そのような環境の中、本学M1では“人間学講座”、M3およびM4では“腫瘍学講座”ならびに“栄養管理や緩和医療に関する臨床講義”などの他大学では受講できない、特色豊かな講義を担当している。M5およびM6のクリクラにては終末期がん患者への適切な治療法やケアについて臨床実習を通じ詳細に教育・指導している。さらに、高齢者に対する外科手術や術前術後管理、NST活動についても同時に修得できるよう密接に指導している。

(2) 大学院教育

わが国では数少ない緩和医療に関する大学院教育を行っている。緩和医療の知識やスキルはもちろんのこと、がん悪液質の解明、がんの進行と生体反応、終末期患者の代謝動態と病態生理、NST活動を通じての代謝・栄養学を駆使した緩和医療の修得や研究を含め、本講座ならではの特徴的なカリキュラムを誇っている。さらに、2008年から、がんプロフェッショナル養成講座を血液内科学と合同で開設し、大学院教育『がんセミナー』も開講している。また、2010年、本学第一教育病院に新たに緩和ケアセンターが開設され、緩和ケア病棟と緩和ケアチームが一体化して統合的に運営されるようになり、さらに、2013年10月から在宅訪問診療を開始し、緩和ケアチーム、緩和ケア病棟、そして在宅緩和ケアが有機的に連動することによって本講座の診療領域が大きく拡大されることになった。したがって、これと同時に教育の場としての視野も大きく広がり、全国トップクラスの最新医療を展開する急性期病院の第一教育病院と、専門性の高い医療施設である七栗記念病院という二つの優れた教育施設での特徴的な緩和ケア教育の実践が可能となり、しかも双方への流動的な対応ができ、大学院生や研修生にとっては一度にあらゆる緩和ケア教育を受けることができることとなった。なお、大学病院で緩和ケア病棟を有する施設は少なく、藤田保健衛生大学はこのうち2施設を有する世界でも類を見ない規模の教育施設となっている。

(3) 本学専門学校教育

医療技術学部2年生に対し、多数の患者に施行している胃瘻、腸瘻の手術および管理や疼痛ケアを含む緩和医療などの講義を行っている。さらに、将来臨床検査技師を目指す医療科学部臨床検査学科第4学年を対象として、代謝栄養学を中心とした卒業論文指導と同時にNSTのプレスタッフとしての体験実習を行っている。

(4) 他大学・他施設における講義

当講座がわが国で数少ない緩和医療学講座であり全国の大学や医療施設で数多くの講義を担当しているが、実際の研修型講義は本講座担当科でのみ実施されている。多くの施設から研修や見学の方々から来られ

ている。またNST活動の拠点でもあることから他大学の医学部教育にも数多く招聘され参加している。加えて、将来のNSTの中核を担う医師や看護師、薬剤師、管理栄養士あるいは臨床検査技師の教育にも積極的に、全国各地でNST活動の実際を講義している。

2. 研究

教室では、代謝・栄養学や腫瘍学に関する基礎的研究を行っており、①がん悪液質の解明、②担がん患者のサイトカインネットワークと代謝反応、③がん進展形式と生命予後、④死の生理学、⑤肝・腸管・骨格筋臓器間インターアクションの解明、⑥腸管粘膜蛋白代謝動態と腸管細菌叢の関係、⑦創傷治癒促進に関する研究などを臨床・実験双方から行っている。実験的研究は、主に七栗研究所にて研究所のスタッフとともに本格的な動物実験を進めており、リアルタイムPCRやメタボリックゲージなど代謝学的解析・実験が可能な設備が整っている。また、文部科学省や厚生労働省の科学研究として⑧全国のNSTの活動状況と効果に関する大規模調査、⑨食の安全性と特別用途食品に関する研究など多くの研究テーマに取り組んでいる。

II. プログラム責任者・研修統括者

【プログラム責任者】東口高志（教授）

①日本静脈経腸栄養学会理事長、②アジア静脈経腸栄養学会理事長、③世界外科代謝栄養学会副理事長、④日本栄養療法推進協議会理事、⑤日本緩和医療学会理事、⑥PEGドクターズネットワーク理事、⑦日本外科学会代議員、⑧日本臨床外科学会評議員、⑨日本肝胆膵外科学会評議員、⑩日本外科代謝栄養学会評議員、⑪日本クリニカルパス学会評議員、⑫日本死の臨床研究会世話人、⑬日本肥満症治療学会評議員、⑭日本消化器病学会東海支部評議員、⑮愛知緩和医療研究会代表世話人、⑯三重NST研究会顧問、⑰三重緩和医療研究会代表世話人、⑱三重中勢緩和ケア研究会代表世話人、⑲愛知豊明地域連携ネットワーク代表世話人、⑳三重中勢地域連携ネットワーク代表世話人、㉑七栗緩和ケアセミナー代表世話人、など

【研修統括者】東口高志（教授）

III. 運営指導体制および指導医数

教授 1名、准教授 2名、講師 2名、助教 4名、大学院生 3名、特別研究員 1名、研究員 3名

・第一教育病院：教授 1名、准教授 1名、講師 1名、助教 1名、大学院 1名、研究員 1名

・七栗記念病院：准教授 1名、講師 1名、助教 3名、大学院生 2名、特別研究員 1名、研究員 2名

日本緩和医療学会暫定指導医	4名
緩和ケア指導者研修会修了者	7名
緩和ケア研修会修了者	9名
日本外科学会指導医	3名
専門医	3名
日本消化器外科学会指導医	3名
専門医	3名
日本消化器病学会専門医	3名
日本肝臓学会専門医	2名
日本泌尿器科学会専門医	1名
日本静脈経腸栄養学会教育指導医	3名
NST医師セミナー／TNT修了者	9名
米国静脈経腸栄養学会指導者研修修了者	1名
欧州静脈経腸栄養学会指導者研修修了者	2名

がん治療認定医	1名
日本消化器内視鏡学会専門医	1名

IV. 臨床実績

本学緩和医療科の外来診療は、原則的に予約制で月～金曜日、連日緩和ケア対象患者中心の外来診察日としている。患者本人だけでなくご家族だけの入院相談も行っている。NHKをはじめとするテレビ番組や様々なメディアで当講座の診療成績が取り上げられたこともあり、遠方からの患者も少なくない。本学の緩和ケアセンターは緩和ケアチームが一体化して活動しており、病床数は19床であるが、緩和ケアチームでの診療対象患者は常に20～30名であり、入院中の患者だけでも計40～50名ほどの緩和ケア対象患者をケアしている。また、2013年10月から在宅訪問診療を開始し、在宅緩和ケアにも取り組んでいる。

一方、七栗記念病院では月～金曜日に緩和ケア対象患者中心の新患外来診療を行っている。入院（緩和ケア病棟20床、一般病棟での緩和ケア病床35床）と外来フォロー（30名ほど）で計80～100名の緩和ケア患者を常に診させていただいている。

V. 研修カリキュラム

1. 緩和医療学大学院コース

- ①外科・緩和医療学講座大学院生は診療・臨床研究・実験的研究を通して学位（博士号）取得と同時に緩和医療専門医の取得を目指す。また、NST（栄養サポートチーム）の一員として専門的な代謝・栄養学についても修練を積み、代謝・栄養学を駆使できるNST医師を目指す。臨床研修は本学緩和ケアセンターおよび七栗記念病院のいずれでも実施可能である。
- ②1年次、2年次は主に臨床に従事し、幅広い外科知識、技術および緩和医療の知識・手法と全人的対応を習得する。緩和ケア病棟や緩和チームのスタッフとして臨床に参加。2年次以降はNSTスタッフも兼任。同時に臨床研究も行い研究発表を積極的に行う。3、4年次は、臨床に従事しつつ実験的研究を行い、さらに質の高い研究発表や論文作成を行う。希望によりうち1年間は実験的研究に専念できる。がん悪液質や腫瘍代謝学的な研究のほか、発癌と増殖、免疫学的生体反応などについて研究する。学位取得後は引き続き修練を積み専門医の取得を目指す。
- ③所属・身分：外科・緩和医療学講座の大学院学生、学位取得後は助教あるいは助教（定員外）または講師（定員外）
- ④研修協力病院：鈴鹿回生病院、尾鷲総合病院、市立伊勢総合病院、塩川病院など
- ⑤専門医取得：日本緩和医療学会専門医（緩和医療学関連学会：日本緩和医療学会、日本死の臨床研究会など、NST医師（代謝・栄養学関連学会：日本静脈経腸栄養学会、日本外科・代謝栄養学会など）、日本外科学会専門医、日本消化器外科学会専門医、日本消化器病学会専門医など

2. 外科・緩和医療学大学院コース

- ①外科・緩和医療学講座大学院生は診療・臨床研究・実験的研究を通して学位（博士号）取得と同時に外科専門医および緩和医療専門医の取得を目指す。また、NST（栄養サポートチーム）の一員として専門的な代謝・栄養学についても修練を積み、代謝・栄養学を駆使できるNST医師を目指す。臨床研修は本学緩和ケアセンターおよび七栗記念病院のいずれでも実施可能である。
- ②1年次、2年次は主に臨床に従事し、幅広い外科知識、技術および緩和医療の知識・手法と全人的対応を習得する。外科病棟NSTスタッフを兼任。同時に臨床研究も行い研究発表を積極的に行う。3、4年次は、臨床に従事しつつ実験的研究を行い、さらに質の高い研究発表や論文作成を行う。緩和ケア病棟NSTスタッフ兼任。希望によりうち1年間は実験的研究に専念できる。がん悪液質や腫瘍代謝学的な研究の

ほか、発癌と増殖、外科的侵襲と代謝学的生体反応などについて研究する。学位取得後は引き続き修練を積み専門医の取得を目指す。また、外科学に緩和医療を包含した腫瘍外科学のスペシャリスト（オンコロジスト）としても研鑽を積む。

- ③所属・身分：外科・緩和医療学講座の大学院学生、学位取得後は助教あるいは助教（定員外） または講師（定員外）。
- ④研修協力病院：鈴鹿回生病院、尾鷲総合病院、市立伊勢総合病院、塩川病院など
- ⑤専門医取得：日本外科学会専門医、日本消化器外科学会専門医、日本消化器病学会専門医、日本緩和医療学会専門医（緩和医療学関連学会：日本緩和医療学会、日本死の臨床研究会など）、NST医師（代謝・栄養学関連学会：日本静脈経腸栄養学会、日本外科・代謝栄養学会など）

3. 腫瘍専門医養成大学院コース・化学療法専門医・緩和医療専門医養成コース

- ①本コースは外科・緩和医療学講座と血液内科学講座の合同で開設しており、東海がんプロフェッショナル養成プランに則したがん化学療法および緩和医療専門医師養成と学位を有する医学博士の育成を目的としている。したがって、がん治療にかかわるすべての講座や診療部門で研鑽を積む意志があり、大学院への進学を希望する医師を対象として、1) がん化学療法および2) 緩和医療の専門医と3) 学位の取得を同時に目指すものである。なお、本講座の特徴である代謝・栄養学的な修練も可能であり、がん治療だけでなくNST（栄養サポートチーム）における指導者を目指すことも可能である。
- ②第1年次（臨床研修）；各科（実際の基盤となる診療科あるいは講座）での臨床研修を基本とし、医学セミナーおよび腫瘍学先端セミナーやがんセミナーを含む選択式セミナーの受講につとめる（以下4年間を通じて各セミナーを受講し必要単位を取得する）。第2年次（臨床研修）；各科（実際の基盤となる診療科あるいは講座）での臨床研修を基本とするが、各科3～6ヶ月間で血液内科学と外科・緩和医療学講座（臨床研修は本学緩和ケアセンターおよび七栗記念病院のいずれでも実施可能である。また両施設でも可能。）をローテーションする（必須）。この研修中にがん専門医あるいは認定医資格取得に必要な症例数を経験し、提出書類の記載を同時に行うものとする。第3、4年次（臨床的・実験的研究）；各科（実際の基盤となる診療科あるいは講座）にて臨床あるいは実験に携わりながら研究を実施し、学位取得の準備を進める。
- ③所属・身分：外科・緩和医療学講座の大学院学生、学位取得後は助教あるいは助教（定員外） または講師（定員外）。
- ④研修協力病院：鈴鹿回生病院、尾鷲総合病院、市立伊勢総合病院、塩川病院など
- ⑤専門医取得：日本緩和医療学会専門医（緩和医療学関連学会：日本緩和医療学会、日本死の臨床研究会など）、日本臨床腫瘍学会専門医（がん薬物療法専門医）、NST医師（代謝・栄養学関連学会：日本静脈経腸栄養学会、日本外科・代謝栄養学会など）、日本外科学会専門医、日本消化器外科学会専門医、日本消化器病学会専門医など

4. 緩和医療学修練コース

- ①緩和医療学修練コースでは緩和医療専門医取得を目指して診療実績・臨床経験や研究業績のほか、全人的医療に関する知識・手法を習得する。希望に応じて同時に臨床的・実験的研究を行って緩和医療学・腫瘍学のスペシャリストを目指す。また、NST（栄養サポートチーム）の一員として専門的な代謝・栄養学についても修練を積み、NST医師の取得を目指す。なお、臨床研修は本学緩和ケアセンターおよび七栗記念病院のいずれでも実施可能である。
- ②1年次、2年次は主に臨床に従事し、幅広い緩和医療の知識、技術を習得する。緩和ケア病棟スタッフ、緩和ケアチームスタッフのほか、緩和ケア病棟のNSTスタッフを兼任。同時に臨床研究も行い研究発表を

積極的に行う。3、4年次以降は、さらに緩和医療医として多くの臨床症例を経験しつつ、臨床的あるいは実験的研究を行い研究発表や論文作成を行って、基礎医学に立脚した緩和医療専門医および腫瘍学のスペシャリスト（オンコロジスト）を目指す。緩和ケア病棟NSTスタッフも兼任。

- ③所属・身分：外科・緩和医療学講座に所属し医学部助手（定員外）となる。学位取得後は業績に応じて助教（定員外）あるいは講師（定員外）。
- ④研修協力病院：鈴鹿回生病院、尾鷲総合病院、市立伊勢総合病院、塩川病院など
- ⑤専門医取得：日本緩和医療学会専門医（緩和医療学関連学会：日本緩和医療学会、日本死の臨床研究会など）、NST医師（代謝・栄養学関連学会：日本静脈経腸栄養学会、日本外科・代謝栄養学会など）

VI. 窓口担当者

東口 高志（教授）

TEL：0562-93-9014（本学）

FAX：0562-93-0051（本学）

e-mail：t-gucci30219@herb.ocn.ne.jp

藤田保健衛生大学病院

科	コース	年次									備考 ①概要、 ②研修内容（専門医、大学院）等、③所属・身分、 ④研修協力病院、⑤専門医取得
		3	4	5	6	7	8	9	10	11以降	
緩和医療科	緩和医療学大学院コース（募集人数 各年2名）										<p>①外科・緩和医療学講座大学院生は診療・臨床研究・実験的研究を通して学位（博士号）取得と同時に緩和医療専門医の取得を目指す。また、NST（栄養サポートチーム）の一員として専門的な代謝・栄養学についても修練を積み、代謝・栄養学を駆使できるNST医師を目指す。臨床研修は本学緩和ケアセンターおよび七栗記念病院のいずれでも実施可能である。</p> <p>②1年次、2年次は主に臨床に従事し、幅広い外科知識、技術および緩和医療の知識・手法と全人的対応を習得する。緩和ケア病棟や緩和チームのスタッフとして臨床に参加。2年次以降はNSTスタッフも兼任。同時に臨床研究も行い研究発表を積極的に行う。3、4年次は、臨床に従事しつつ実験的研究を行い、さらに質の高い研究発表や論文作成を行う。希望によりうち1年間は実験的研究に専念できる。がん悪液質や腫瘍代謝学的な研究のほか、発癌と増殖、免疫学的生体反応などについて研究する。学位取得後は引き続き修練を積み専門医の取得を目指す。</p> <p>③所属・身分：外科・緩和医療学講座の大学院学生、学位取得後は助教あるいは助教（定員外）または講師（定員外）</p> <p>④研修協力病院：鈴鹿回生病院、尾鷲総合病院、市立伊勢総合病院、塩川病院など</p> <p>⑤専門医取得：日本緩和医療学会専門医（緩和医療学関連学会：日本緩和医療学会、日本死の臨床研究会など、NST医師（代謝・栄養学関連学会：日本静脈経腸栄養学会、日本外科・代謝栄養学会など）、日本外科学会専門医、日本消化器外科学会専門医、日本消化器病学会専門医など</p>
	専攻科大学院生として臨床および実験的研究に従事、博士号の獲得を目指す	専攻科大学院生として臨床および臨床的研究に従事	専攻科大学院生として臨床的および実験的研究に従事、博士号の獲得を目指す	<p>緩和医療学専門医（日本緩和医療学会専門医制度）の取得を目指す。大学医学部（本学ならびに七栗記念病院）での研修修了後の身分は医学部助教（定員外）または学位を取得し業績によっては講師（定員外）</p>							

藤田保健衛生大学病院 緩和医療科後期研修プログラム

科	コース	年次									備考 ①概要、 ②研修内容（専門医、大学院）等、③所属・身分、 ④研修協力病院、⑤専門医取得	
		3	4	5	6	7	8	9	10	11以降		
緩和医療科	名称											
	外科・緩和医療学大学院コース（募集人数 各年2名）		専攻科大学院生として臨床および臨床的研究に従事		専攻科大学院生として臨床的および実験的研究に従事、博士号の獲得を目指す							<p>外科および消化器外科専門医ならびに緩和医療専門医の取得を目指す。大学医学部（本学および七栗記念病院）での研修終了後の身分は医学部助教（定員外）または学位を取得し業績によっては講師（定員外）</p> <p>①外科・緩和医療学講座大学院生は診療・臨床研究・実験的研究を通して学位（博士号）取得と同時に外科専門医および緩和医療専門医の取得を目指す。また、NST（栄養サポートチーム）の一員として専門的な代謝・栄養学についても修練を積み、代謝・栄養学を駆使できるNST医師を目指す。臨床研修は本学緩和ケアセンターおよび七栗記念病院のいずれでも実施可能である。</p> <p>②1年次、2年次は主に臨床に従事し、幅広い外科知識、技術および緩和医療の知識・手法と全人的対応を習得する。外科病棟NSTスタッフを兼任。同時に臨床研究も行い研究発表を積極的に行う。3、4年次は、臨床に従事しつつ実験的研究を行い、さらに質の高い研究発表や論文作成を行う。緩和ケア病棟NSTスタッフ兼任。希望によりうち1年間は実験的研究に専念できる。がん悪液質や腫瘍代謝学的な研究のほか、発癌と増殖、外科的侵襲と代謝学的生体反応などについて研究する。学位取得後は引き続き修練を積み専門医の取得を目指す。また、外科学に緩和医療を包含した腫瘍外科学のスペシャリスト（オンコロジスト）としても研鑽を積む。</p> <p>③所属・身分：外科・緩和医療学講座の大学院学生、学位取得後は助教あるいは助教（定員外）または講師（定員外）</p> <p>④研修協力病院：鈴鹿回生病院、尾鷲総合病院、市立伊勢総合病院、塩川病院など</p> <p>⑤専門医取得：日本外科学会専門医、日本消化器外科学会専門医、日本消化器病学会専門医、日本緩和医療学会専門医（緩和医療学関連学会：日本緩和医療学会、日本死の臨床研究会など）、NST医師（代謝・栄養学関連学会：日本静脈経腸栄養学会、日本外科・代謝栄養学会など）</p>

藤田保健衛生大学病院 緩和医療科後期研修プログラム

科	コース 名称	年次									備考 ①概要、 ②研修内容（専門医、大学院）等、③所属・身分、 ④研修協力病院、⑤専門医取得
		3	4	5	6	7	8	9	10	11以降	
緩和医療科	腫瘍専門医養成大学院コース・化学療法専門医・緩和医療専門医養成コース (がんプロフェッショナル養成プログラム対応・募集人数 各年2名まで)										<p>①本コースは外科・緩和医療学講座と血液内科学講座の合同で開設しており、東海がんプロフェッショナル養成プランに則したがん化学療法および緩和医療専門医養成と学位を有する医学博士の育成を目的としている。したがって、がん治療にかかわるすべての講座や診療部門で研鑽を積む意志があり、大学院への進学を希望する医師を対象として、1)がん化学療法および2)緩和医療の専門医と3)学位の取得を同時に目指すものである。なお、本講座の特徴である代謝・栄養学的な修練も可能であり、がん治療だけでなくNST（栄養サポートチーム）における指導者を旨することも可能である。</p> <p>②第1年次（臨床研修）；各科（実際の基盤となる診療科あるいは講座）での臨床研修を基本とし、医学セミナーおよび腫瘍学先端セミナーやがんセミナーを含む選択式セミナーの受講につとめる（以下4年間を通じて各セミナーを受講し必要単位を取得する）。第2年次（臨床研修）；各科（実際の基盤となる診療科あるいは講座）での臨床研修を基本とするが、各科3～6ヶ月間で血液内科学と外科・緩和医療学講座（臨床研修は本学緩和ケアセンターおよび七栗記念病院のいずれでも実施可能である。また両施設でも可能。）をローテーションする（必須）。この研修中にがん専門医あるいは認定医資格取得に必要な症例数を経験し、提出書類の記載を同時に行うものとする。第3、4年次（臨床的・実験的研究）；各科（実際の基盤となる診療科あるいは講座）にて臨床あるいは実験に携わりながら研究を実施し、学位取得の準備を進める。</p> <p>③所属・身分：外科・緩和医療学講座の大学院学生、学位取得後は助教あるいは助教（定員外）または講師（定員外）</p> <p>④研修協力病院：鈴鹿回生病院、尾鷲総合病院、市立伊勢総合病院、塩川病院など</p> <p>⑤専門医取得：日本緩和医療学会専門医（緩和医療学関連学会：日本緩和医療学会、日本死の臨床研究会など）、日本臨床腫瘍学会専門医（がん薬物療法専門医）、NST医師（代謝・栄養学関連学会：日本静脈経腸栄養学会、日本外科・代謝栄養学会など）、日本外科学会専門医、日本消化器外科学会専門医、日本消化器病学会専門医など</p>
											<p>日本臨床腫瘍学会専門医「がん薬物療法専門医」および日本緩和医療学会専門医の取得を目指す。大学医学部での研修修了後の身分は医学部助教（定員外）または学位を取得し業績によっては講師（定員外）など</p>
											<p>専攻科大学院生として臨床的および実験的研究に従事、博士号の獲得を目指す</p>
											<p>専攻科大学院生として臨床および臨床的研究に従事</p>

藤田保健衛生大学病院 緩和医療科後期研修プログラム

科	コース 名称	年次									備考 ①概要、 ②研修内容（専門医、大学院）等、③所属・身分、 ④研修協力病院、⑤専門医取得	
		3	4	5	6	7	8	9	10	11以降		
緩和医療科	緩和医療学修練コース（募集人数 各年2名）					大学医学部（本学緩和ケアセンター・緩和ケアチームおよび七栗記念病院）にて研修。臨床および臨床研究（希望により実験研究）に従事。緩和医療専門医を目指す。希望により学位取得も可。						<p>①緩和医療学修練コースでは緩和医療専門医取得を目指して診療実績・臨床経験や研究業績のほか、全人的医療に関する知識・手法を習得する。希望に応じて同時に臨床的・実験的研究を行って緩和医療学・腫瘍学のスペシャリストを目指す。また、NST（栄養サポートチーム）の一員として専門的な代謝・栄養学についても修練を積み、NST医師の取得を目指す。なお、臨床研修は本学緩和ケアセンターおよび七栗記念病院のいずれでも実施可能である。</p> <p>②1年次、2年次は主に臨床に従事し、幅広い緩和医療の知識、技術を習得する。緩和ケア病棟スタッフ、緩和ケアチームスタッフのほか、緩和ケア病棟のNSTスタッフを兼任。同時に臨床研究も行い研究発表を積極的に行う。3、4年次以降は、さらに緩和医療医として多くの臨床症例を経験しつつ、臨床的あるいは実験的研究を行い研究発表や論文作成を行って、基礎医学に立脚した緩和医療専門医および腫瘍学のスペシャリスト（オンコロジスト）を目指す。緩和ケア病棟NSTスタッフも兼任。</p> <p>③所属・身分：外科・緩和医療学講座に所属し医学部助手（定員外）となる。学位取得後は業績に応じて助教（定員外）あるいは講師（定員外）。</p> <p>④研修協力病院：鈴鹿回生病院、尾鷲総合病院、市立伊勢総合病院、塩川病院など</p> <p>⑤専門医取得：日本緩和医療学会専門医（緩和医療学関連学会：日本緩和医療学会、日本死の臨床研究会など）、NST医師（代謝・栄養学関連学会：日本静脈経腸栄養学会、日本外科・代謝栄養学会など）</p>